

〈史料紹介〉 県令白根多助への書簡

— 群馬県令楫取素彦と埼玉県官から —

芳賀 明子

はじめに

当館の白根家文書には、第二代埼玉県令白根多助（文政二年～明治十五年 山口土族 権令・県令在任期間 明治六年十二月～十五年三月）宛の書簡が、三百五十通程残されている。中でも、百通余に及ぶ県官からの書簡は、県令への報告や伺いなど公的な内容を含むものが多く、初期埼玉県政の一端が知れる貴重な資料群となっている。

これらの書簡については、当館の職員有志が長年にわたり解読を進めてきたが、その成果の一端として、書記官吉田清英の全書簡を、昨年度の紀要に紹介させていただいた。⁽¹⁾ 今年度は引き続き、群馬県令楫取素彦の全書簡と、白根の下で県政に当たった四人の県官、岸良俊介・笹田黙助・川島樺坪・高津雄介の主要な書簡を紹介していきたい。

書簡は、年代の記載されているもの、推定できるものを編年順に配列し、その後に、年不明のものを月日順に配列した。表題は「諸家文書目録Ⅳ」⁽²⁾に抛り、（ ）内に白根家文書の請求番号を付した。旧字体は新字体とし、変体仮名は仮名に改めた。行替は紙面の都合により省略した。なお、各人には簡単な履歴を付した。⁽³⁾

一 楫取素彦の書簡

楫取素彦（文政十二年～大正元年 山口土族）は、足柄県参事から明治七年七月に熊谷県の権令に赴任。熊谷県の廃止に伴い、九年九月から群馬県令となり、十七年三月に元老院議員となって去るまで、九年余にわたり在職した。この間、白根とは隣県の県令として連絡を取り合い、また、山口時代からの友人として親交を深めた。⁽⁴⁾

書簡①②③④⑤は地租、⑥は高崎線の前橋延長、⑧⑨は群馬県庁の前橋移転問題に関するものである。⑦の杉民治は妻寿子（吉田松陰妹）の兄、⑩の中山了暁は真宗教会酬恩社の人物、⑬⑭は楫取と白根の私的な交友、⑯⑰は白根の子息勝二郎宛の書簡である。

楫取① 川村正平徴兵官訃書拝見 明治十一年十一月二十四日（白根家一四）

御出京ニ而御尋も被下候由、増々御壮栄奉賀候、小生も過ル五日より出京、不図滞京永曳、明日より帰県仕候、遂ニ御旅寓江拝参も不得仕、何ソ御用向共御座候得ハ相伺度候得共、何分短日繁多、且ツ明日

は帰県ニ付一層取紛、御無沙汰可仕候、扱過日川村正平徴兵之事ニ就見込書述候由、小生ニも一見ヲ托候間、御手元之所御済相成候得ハ御廻シ可被下候、小生より同人ニハ返却可仕候、此段ヲモ添テ得高覽候、草々不備 十一月二十四日 楳取生 白根明府台下 尚川村正平より某其ノ書綴候書類も差出置候由、此も一同御廻シ可被下奉頼候、以上 素彦 白根様

楳取② 福井光就職依頼 明治十二年四月九日（白根家一）

前ニ願試候小生不遁者福井光と申者、目今県下師範校教員相勤（給料十五円）居候処、当節同人父福井信政山口より罷越申候ニハ、倅共官員修業為致度、就テハ族縁之者小生許ニテ使用候義聊用捨も有之、何卒等外式等位ニテ宜候間、御県学務課之末ニ御加被下間敷候哉願出試候、即今御都合六ヶ敷時ハ、少々時日ハ後候共宜候否、御一報可被下候、草々又白 六月十二日 素彦生 白根君机下

楳取③ 福井光学務課採用 [明治十二年] 六月二十三日（白根家六）

乍時分雨勝ニ御座候処、弥御健剛奉万賀候、扱て御願申出置候福井光学務課へ御採用可被下之旨、深ク奉謝候、即本人差出候、此上宜御引立可被下偏ニ奉頼候、先ツ傭ニ被成置候而、事務ニも相慣、課員之見込ニも相適候上ハ、可然奉願候、小生よりハ給料之儀ハ強而不申出候、凡ソ等外二等位之者共歟と前日申出置候次第ニ付、総而宜御委託仕候、先は右御頼旁如此御座候、草々頓首 六月二十三日 素彦 白

根明府台下 追而御次男様内務省江転任、御首尾ハ不及申ニ、第一御父子様御間近被為居奉大慶候、此段併而御歎申述候也

楳取④ 貢租延納一件返書 [明治十三年] 六月六日（白根家七）

本月一日附御手書相達謹誦、兎角雨天勝ニ候処、弥御健康御滞京、且延納一條頗ル御尽力之末、内蔵而卿へ懇談、更ニ式ケ年据置、明治十四年より起算、向五拾ケ年賦延納之積詮義相成候由、素より貴県ニ於テハ百万円ヲ超過候金額而省決評之旨趣、充分とハ不被思食儀御尤千万、尚御痛心之程遙察仕候、併シ折角之両卿懇談ニ被基、一先御帰県部民へ御説諭ニ被及候云々御報示之廉委曲拝承、当県江ハ未為何移も無之候得共、前日上申ニ及候旨趣ハ、即向五拾ケ年賦ハ既ニ上申立案之事ニも候故、左相成候時ハ漕附方且ニ可相成哉と奉存候、唯如貴案各県難易ニ依り、駈引と申儀ハ被行兼候事ナラン乎、将又五拾ケ年賦と申内、一村毎ニテ割出候得ハ算当も可相立之処、一人別ニ共当り候而ハ至難之議出来ハ必然ニ可有之、野郎県令も云々申居候由、小生当節出京も不得仕、尤大蔵卿より延納一件移り方之模様ニ寄候而ハ、座シテ引請候事ニも至間敷敷、先は御答迄、草々御高覧候、頓首不備六月六日 素彦 白根多助様尊下 追而近日県会御開之由、御心配と奉存候、当県昨日閉会、先ツ片安神仕候也

楳取⑤ 県税金義消滅ニ付 [明治十三年] 六月十二日（白根家九）

本年雨勝ニ候処、御管下麦作等如何可有之哉、県下蚕業も頗ル困難ニ

ハ候得共、漸々成熟ニ至候村方も有之、概シテ七步強ニハ可当見込ニ御座候、扱ハ壬申増石代金費用一条、嘗而御面倒申入候未御協議、県税償却論ニ帰着候得共、本年度より県税金義消滅、右二代用ナル金員無之、困迫之際不得已勸業課員一名差出シ御相談為致候間、宜御聞置、何分之趣被仰聞候様相願候、時氣不齊御大切御自重專侍候、草々不備 六月十二日 素彦 白根明府執事

楳取⑥ 民力請願 「明治十三年」十二月二十八日(白根家五)

月迫り御繁多之状不勝想像ニ候、帰県後如何、定メ而御健康奉太賀候、御帰京中ハ度々御来訪、私よりハ風邪中御無沙汰、失敬打過候段、丸々御海恕可被下候、鉄道論も追々民力請願之方ハ相進み、兎ニ角御同前よりハ建言可然由トノ説ニ而、何卒御連印可被成、奔走之勞ハ私相任シ可申候、尚太田報助府庁採取之廉、早速小向迄申送候、物音次第御報知可致候、明暮ハ滞京候故、相応ナル御用ハ可被仰下候、時分柄寒威御大切御加愛專侍候、草々頓首 十二月二十八日 素彦 白根明府台下 尚々乍尾筆御奥方様ニ宜御伝声可被下候、山妻病状依然、尤異状も無之候、時分柄看護人希、込り入候事計り也。

楳取⑦ 杉民治東京迎入ノ件 「明治十四年」六月二十三日(白根家二)

御紙上拝見、瀧口書状符合、多分成就之時機到来スルナラン、扱素彦ニ異議無之段ハ、御序之節民治迄被仰越候テモ宜候得共、只決議之未本人ヲ東京迄迎候、能々順序ヲ尽シ不申テハ不相叶、此ニハ彼民治

県令白根多助への書簡(芳賀)

妹一旦次男許ヲ立去り、帰萩ハ於本人ニ情実有之積り、次男道明姑婦之間ニ聊不叶ヲ生シ候哉之様子、是ニテ次男ト杉トノ間生涯之不都合ヲ可生と懸念之折柄ニ付、旁民治妹も素彦手許ニ添候上は、治療之方略も有之、随分和譜方ハ行届カセ可申候、只々其間多少之順序ヲ経不申テハ又候父子之間ニマテ如何様之疑心ヲ起シ可申も難測、その次第ハ尚御面談ニ尽シ可申候、兎ニ角異議ハ無之、只本人ヲ迎へ候期限ヲ追テ取極メ候事ニ御含可被下候、書面御一見後、御火中奉希上候、草々不備 六月二十三日 素彦 白根様内覽侍史

楳取⑧ 高崎士族の動向 「明治十四年」八月九日(白根家一)

甚熱難凌候処、弥御揃御万福奉賀候、近来御病症如何ニ候哉、心外之御無沙汰肖本意ニ候、此節御聞及ニ可相成、管下高崎士族共同駅商人ヲ煽動紛議ヲ起シ、格別心配ニ渉ル程之事も無之候得共、何分聞分無之ニハ込り入申候、萩表杉民治迄御懸合一條如何相成候哉、御病中口氣やかま敷候得ハ、己ニ其発言ヲ御煩ハセ申候以上ハ、小生より直接ニ文通仕候様致度、必ス深ク御配意被下聞敷候、県下赤城牧社ニ而製候粉牛乳六瓶、馬車便呈上、御笑留可被下候、生乳御用之際乾乳ヲ呈候ハ不都合ニ候得共、陸軍病院杯乳質之精良ナル由ヲ以、毎々需求ニ預り候差出申候、御試可被成候、時下草々御大切御養生奉專侍申候、先ハ御見廻迄、万々如此候、頓首 八月九日 素彦 白根様侍史 二白、奥方様ニも宜敷御鶴声可被下候、以上

楫取⑨ 高崎士族騒動 明治十四年九月三日(白根家一三)

朝夕ハ少々凌能相成候処、御病状如何御座候哉、先ツハ御平穩之様ニも承り、御療養此際別シ而御大切と奉存候、過日ハ瀧口吉右衛門電信ヲ御示被下、彼方相談振相調候趣、尚昨日民治より去月二十四附書状差送り、本人納得候由ヲ報シ越候、即民治より尊台江ハ直チニ御答申出候トノ事、御病中種々御手数ヲ相掛候段奉恐入候、今後ハ幸得ヲ聞續、本人ヲ出京為致可申、最早御心配被下間敷候、先ハ此ノ件得尊意度、過日之御答旁、草々如此候、頓首不備 九月三日 素彦 白根明府尊下 追伸、御療養幾重ニも御手ばかり無之様專折仕候、乍末筆御家族様方ニも宜敷御致意可被下候、以上、管下高崎一件も、今日ニテハ泣寝入り之姿、一時ハ内務省直訴云々申触候処、右ヲハ変換、上等才判ニテ、彼等書面ニ附箋之廉不伏ヲ訴候手筈ニ致候哉之趣、もはや格別之事も有之間敷、尤貧窮士族之有シ限りハ面倒ノ絶間ハ有之間敷乎、是ニハ困りものと奉存候、以上 素彦 白根様

楫取⑩ 馬鈴薯片栗送呈 白根勝二郎宛 明治十四年十二月二十八日

(白根家一六〇) *

嗚々御繁多奉察入候、昨日馬鈴薯片栗少々為持候、此ハ大人ニ御進メ可被下候、尚桐火桶胴差出候、御都テナカラ東京江廻シ御荷物一同御運搬奉頼候、只今之焼目ハ不宣候故、東京ニテ御見計之上ニ一応御削ラセ、更ニ焼目ヲ付ケ、銅之火袋ヲ御注文可被下候、運賃之儀ハ出来之上御送り被下候節御算用可仕、旁宜敷奉頼候、早々頓首 十二月二十

八日 素彦 白根君侍史 御名前荷札モ附差置候也

楫取⑪ 多助一周年忌ニ付 白根勝二郎宛 明治十六年三月十六日

(白根家一五七) *

貴簡謹誦、得我軒君御一周年忌過日十四日於湯島切通麟祥寺御執行被成候旨被仰下、即薄奠ニテモ通送可仕之処、不日出京之心算も有之、其節為参行香可仕候、歲月如流御一統御感愴之段不堪想像ニ候、時下残寒御自重專禱候、草々頓首 三月十六日 楫取素彦 白根勝二郎様

楫取⑫ 福田某属吏任用ノ件 一月二十日(白根家三)

珍敷風雪御勝安奉太賀候、滞京中は御来車、殊にニ御携物別シテ難有奉存知候、小生過ル十三日帰県、例之風邪中押而帰県候故、尊邸御挨拶参堂も不得仕失敬之至、御海量相願候、大坂小向より返書差送り定メテ專一君之許江も通信可有之、建野より伝語ニハ、当県七等属福田某ヲ引請申候筈ニ取計置候故、太田ハ小生ニ引請不申哉之説ニ候得共、折返シ其儀ハ不相叶、且ツ於本人ニも大坂地方望之事切迫ニ付、是非引請候様申遣候、左様御承知可被下候、尚又過日御示被下候治罪法施行ニ就、内務卿迄御建言之写一通御廻シ被下度、此段ヲモ相願候、申も乍疎時下御自重專禱候、草々頓首 一月二十日 素彦 白根明府梧右

楯取⑬ 秩父絹送付ノ件 六月四日(白根家一二)

過日ハ罷出御馳走難有奉謝候、爾後弥御清康南山之御事万賀仕候、扱此秩父絹三反分東京表より頼マレ候序有之、御家族様試ニ御用被成度様御噂も御座候ニ付、差送り申候、紺屋江御遣シテ練り候上御染被成候得ハ、裏地ニテモ又形杯附候得ハ、夜具ノ表ニも可然、東京表店向ノ品ニ比候得ハ、忝足ノ方ハ式三割も低価と申事ニ御座候、自然御不用ニ候得ハ何時手許迄御返し相成候共宜候、先ハ為其、草々頓首
六月四日 追而御家族様江宜しく御伝語奉希上候也 素彦 白根明府侍史

楯取⑭ 今晚面会御断 十月二十一日(白根家一〇)

今日ハ当駅御来着之由、早速御手書并御土産御持せ被下、御芳情深奉謝候、今晚御見舞申度途中迄罷出候処、昨今少々心配ニ相成候件有之、彼是ニ而来客終ニ引返シ、今晚ハ御無沙汰可仕候、明日午後より茶会之様ナルモノヲ以テ御案内申度、御夫婦様ニテ水辺小亭江御来賈ヲ願候積り、孰明朝ハ参堂可仕候得共、先ハ御見廻御断ハリ旁、草々如此候、頓首 十月二十一日 素彦 白根様座石

楯取⑮ 中山了暁死去(白根家八)

僧中山了暁死去之由、可憐事ニ而、管下ニ而も当分説教者無之、築地江も代り之僧差越候様申遣度候処、少々本利ニも改革とか申ゴテ、致候哉之趣、御聞及ニ相成候哉 素彦 白根様

県令白根多助への書簡(芳賀)

二 岸良俊介の書簡

岸良俊介(弘化元年、鹿兒島士族)は、埼玉県成立時に庶務課長に任ぜられ、明治六年に権参事。明治九年五月に若松県参事に転任するが、同県は同年八月に福島県に統合される。その後、群馬県に転じ、明治十年一月より十二年十二月まで、楯取の下で大書記官を務めた。

書簡①は、若松県への転任直前の書簡で、岡村氏は若松県権令岡村昌義、②は、若松県参事へ赴任して間もない明治九年六月の奥羽巡幸への対応について、③は、群馬県と埼玉県との警部交換、④は租税関係の書簡である。

岸良① 参事之義内務卿面会「明治九年」五月二十一日(白根家三三七)

拜啓、昨日ハ御帰県被為在候半奉存候、然ハ過日来種々蒙御懇情深奉謝候、○御談示相成候参事之儀、今朝内務卿江面会、御内存之次第篤と申出候処、委曲承知相成、猶閣下も御直ニ御応接可致段承り候、此段御承知可被下候、○岡村氏未拜命不相成趣、就而は今一兩日滯京相願度奉存候付、何卒可然御繰合置被下候様奉願候、右奉申上置度、勿々如此御座候、敬白 五月廿一日 岸良俊介 白根老台閣下

岸良② 巡幸ニ付 「明治九年」六月二十七日(白根家三二六)

御袖別後、彌以御家内中様御揃御安全可被為居筈、遙ニ奉拝賀候、随而私去ル九日ニ着県、御巡幸ニ付而之諸調物等致一覽、十四日早朝

より出発、福島駅江出張、御着輦奉待居候処、十九日正午十二時被遊
着御、直ニ諸調物差出、翌廿日管下之景況等被 聞召との事ニ付、
赴任早々出張之事故、細事ニ至りてハ一々奉申上候訳ニ至らず恐入候
段前以岩倉・木戸両君へ申置候処、玉座江ハ被 召出候得共、程好
ク御取計被下、右等之都合を以先ハ無滞御用相濟、一昨廿五日帰県
仕、爾來毎動罷在候付、乍憚御静念可被下候、借御県奉職中ハ不一方
御懇情を蒙り、御蔭を以無恙勤務仕、肝銘之至奉万謝候、奉願置候通
り尚此上無御見捨御引立被下候様奉懇願候、着県直様一応之御礼等可
奉申上之処、出張等夫是混雜ニ取紛、終遅延仕候段不悪御汲量奉願
候、○岡村権令ニも一昨日着相成仕合之至御座候、○追々御聞及相成
候通、当地ハ四方山岳ニ而孰れ之通路も十里余之山道大峠等を越し、
出入別而不便之場所ニ而、自然土地・人情も相異り、別世界ニ入候心
持ニ御座候、乍然物産ハ随分多分ニ有之模様、今後世話之致し候様ニ
依りては富饒之地ニ可相成歟と存候得共、亡滅之跡ニ而何分人民資力
ニ乏キ趣ニ相聞得、如何して盛大ニ至るへき歟と思慮罷在候次第御座
候、先ツハ御礼旁奉得尊意度、余ハ期後音候、勿々敬白 六月廿七日
若松より 岸良俊介 白根老台閣下 二白、吉田へも御達相成候哉
ニ伝承仕候、不遠赴任致すへく奉存候、尚々時下御自愛專一奉折候、
例之龜文悪筆、偏ニ御推読奉願候

岸良③ 人事昇給ニ付 [明治十三年] 一月十四日 (白根家三二八) *
拜陳、過日御細書奉敬誦候、時下寒威難凌候得共、御健全被成御精勤

奉慶賀候、扱小池氏より申来候趣を以、県令とも相談、如何様にも繰
合致度存居候得共、当県警部ハ既二年内昇給等いたし、当時警費額不
足を生し居候位にて、繰合方殆と困却仕候間、甚申上兼候へ共、数年
当県警部相勤、随分事務相心得居候、九等警部平井方毅と申者御県江
御採用被下度義相叶間敷や、左候へハ其丈之繰合出来候訳にて、小池
氏より被申越候通り為相運可申存居候、於御県而も必ス定額之御裕余
ハ有之間敷察入候得共、何と歟御都合被成下間敷哉、何卒篤と御熟考
被下度、亦他ニ御氣附も被為在候ハ、無御遠慮被仰聞候様奉願候、
右は(交換之様相成) 閣下ニは別而御仕苦敷義とハ万々御推量罷在候
得共、右之次第にて不得止御相談申上候間、不悪御汲取被下候様奉希
候、此段奉得尊意候、頓首 一月十四日 俊介 白根様尊下 尚々御
覽濟御投火可被下候、尚々閣下江申上候も余り差附ケ間敷義とハ存候
得共、御懇意ニ任せ御内談仕候義ニ御座候付、左様御承知可被下候

岸良④ 建言許否之義ニ付 二月十六日 (白根家三三〇) *
肅啓、御安寧奉慶賀候、陳ハ御建言許否之義ニ付及御問合候処、御草
案相添御懇書被下、難有御礼申上候、熟覽仕候処、至極御尤と感服仕
候、御趣旨貫徹許可相成候義ニ候得ハ、御庇廕を以、当県等も御同様
追徴全其俣指棄可相成哉、左候得は上下之幸福無此上義と歡喜此事ニ
奉存候、如尊命決而他洩ハ不仕候間、此義ハ御安心被下候様奉希候、
御礼旁此旨奉得尊意候、勿々敬白 二月十六日 俊介拜 白根老台閣
下 尚々兎角不順之時候、切角御愛護奉專折候、謹言

三 笹田黙介の書簡

笹田黙介（弘化三年〜大正十四年 山口土族）は白根と同郷で、明治四年に埼玉県十二等出仕となる。明治七年に埼玉県師範学校総長、八年に庶務兼学務課長、九年に警保課長、十四年に警察本署長兼庶務課長、十五年少書記官となる。庶務・学務・勸業・警察の各方面に通じ、白根・吉田両県令を長く補佐した。明治二十三年に熊本県書記官に転じた。

書簡①は明治十一年の巡幸を控えた時期の県令への執務報告、②は組織改革に伴う人事関係の書簡で、同僚を氣遣う笹田の人情が窺える。③は司法省への割愛人事の書簡、④は勝二郎に宛てた形見分けに関する書簡で、白根県令の側近の県官達が列挙されている。

笹田① 留守中執務状況報告「明治十一年」五月十七日（白根家一五）
爾来益御清況可被遊御座、奉賀上候、御留守庁堂相替儀無御座候、此段御放懐可被下候、当度之御巡撫は御管内人民之頭上ニ被り候安危ニ而不一方御痛心之事ト奉恐察候、此事業御高案之通り相運ヒ候ハ、後来之御施政ニ於ル時々物々無支障進歩可仕、衆人之幸福不少義ト奉存候、陳ハ過般紀尾井坂一条ハ国家之大不幸不過之長歎息之至ニ御座候、乍去兇徒悉ク捕ニ就キ、宅連類等無之様子ニ而、先ツ平穩之姿ニは候へ共、此往々供之都合ニ寄り候ハ、可在哉も難計ニ付、監獄等之要処は取締向無油断注意仕居候、此辺ハ御安慮可被下候、朝野新聞ハ

県令白根多助への書簡（芳賀）

国安ヲ害シ候故ヲ以、発兌被停止候、扱又十六日御認之尊翰御過案策之条々奉拝伏候、夫々其手順ニ仕候、ペンキ単色ハ価額ニ相違無之候得共、単色油灰ハ上品之塗方ニ付、監獄ニ而四拾円之増額ヲ要シ候、左候へは師範校も同様ト奉存候、博物館は御管下江御布達ニも相成居、夫々着手ニ臨ミ居候へ共、繰戻シ出来候丈ケハ繰戻シ之取計仕候積ニ御座候、尤該場ハ後來ヲ期シ候事ニ付、今年ニ設ケサレハ明年ニ興ル之機会も可有之ニ付、博物館設置云々之御布達丈ケハ存シ置、實際設置之拳ヲ見合セ、且人民出品之儀延引之御達取計、其も勸業上試験之為メ必用ト見止メ候物品丈ケハ御買上置相成ニ而、可然見込ニ御座候、且又道路修繕は何レ之時ヲ問ハス不被差置条件ニ付、早速着手之積リニ御座候、費用ハ県税ニ而間ニ合候丈ケニ可仕候、御発車之節難波申上候警察費も屯円民課之外ハ暫時繰巻相調申候、十等警部松野廣辞表差出候、雄介ヨリ申上置候由ニ付、實際は取計仕候、右件々申上候、取扱不都合之儀も御座候ハ、御殿命奉願上候、謹言 五月十七日 白根県令殿親展 黙介再拝

笹田② 人事改革具申 明治十四年七月六日（白根家一六）
拝啓、華翰拝読、御不例追々御快方ニ被為趣候由拝承仕、為国家大幸此事ニ御座候、私事も先日以來御通輦一件ニ而陸羽道驅廻り、三四日前帰県仕候、彼是取紛御見舞も不申上、多罪汗顔之至ニ御座候、書記官公御帰県今般御改革之趣承り、実ニ不得止儀と奉存候、已ニ昨日御発令相成、庶務・土木・租税・出納・監獄何れも相響キ、就中庶務・

監獄甚敷差支申候、学務・衛生は兼而課長之注意宜敷訳力、更ニ動揺不仕候、被仰聞候通り監獄ハ備出仕ヲ以成立候場所ニ付、悉皆解免相成候而は手之下差支、不少此等之義ハ情実御汲取奉願候、差向熊谷・川越ハ一人役之処、且本署會計掛も一人ニ付、井原弥門(監獄署會計掛)・大谷吉多(川越支署担任)・岩井武明(熊谷同)ハ書記ニ御拔擢相成候様書記官へ申立置候、右ニ付上へ之方へも地震相及ホシ、村田も庶務へ復職之義、昨日御達相成申候、同人事ハ多年奉職忠勤致居候功も有之、御改革とは乍申、甚氣之毒之事ニ奉存候、且書記官ヨリ本人へ縷々御示諭之趣も有之、副課長之心得ニ罷在候様との義ニ有之由ニ候得共、表ヲ不立事ニ而、課長ヨリ副課長と見做シ候義は出来申間敷、於本人も甚心痛罷在候様子ニ御座候、且私義も警部之方根ニ相成候趣御内諭有之、勿論経済困難之際ニ而覚悟罷在趣ニ異義無御座候、兼而書記官公へ申上候次第も有之候、全体警部之職分ハ甚不相好、先般本署長被命之際ニ奉申上候義も有之候へ共、段々之御懇諭ニ服シ奉職罷在候由、経済困難之折柄、好悪ヲ不問決心仕候、乍去私兼而申上候義ハ兼務之義ニは無之、警察費ヨリ支給相成候上は全く警部一方ヲ望候心事ニ御座候、此度属兼務ト相成候而は新拜命之範ニ相成、自ラ位置も相転シ癖情之考カハ不奉存候へ共、何力居心悪敷心地仕候、警部一方ニ候へは丸テ場所柄も違ひ介意候事無御座候、夫故未タ御請不得仕候、何卒情実御汲取之程奉願候、兼而申上候通、御在職中ハ必ス御膝下ニ而尽力仕候心事ハ毫も不相替候得共、這意ニ無之而は随而責任も薄く相成候は一般之人情ニ可有御座と奉存候、平素之御

寵遇ニ甘へ、不恐憚奉嘆願候、何卒御採納之程奉願候、若又警部一方ニ御詮議相成候上ハ、村田讓吉ハ庶務課長ニ御拔擢も相願度、然ル上は於私も隱ニ補翼仕候道も有之都合宜敷と奉存候、何レ其内御見舞旁出京仕候心得ニ付、其節万縷可申上候、先は奉言歎訴旁愚札為呈仕候、謹白 七月六日 黙介拜 白根県令様御侍側

笹田③ 檜崎景介司法官転任ノ件 明治十四年五月二十六日(白根家一七)

謹啓、極寄景佑事司法省へ採用之義、高津ヨリ申来り候趣ヲ以、本人ニ進退之義縷々御教示被成下候由ニ候処、動止相決兼候歟、昨日拙宅へ罷越、御答ニ差支候情実申聞候間、於私も後來見込有之人物之事ニ付、抑留之点ヨリ懇ニ申諭シ候得共、是以決答不得仕、固テ牧野清三ヲ以内探仕タルニ、本人申分ニは、是迄御引立ヲ蒙リ御恩誼も不少、加ルニ此度之事件ニ付而も御懇篤之御諭示ニ預リ、身上ニ取り過分之榮譽とも可申場合ニ相成、不忍去情実ニ候得共、前途之目的も有之、可成は法省へ転任致度存意之旨申聞候、前件申上候通、本人ニ於テ決テ当県ヲ規避候心事は毫も無之、且於本署も可惜人物ニ候へ共、司法之職務志願之義も難黙止儀ニ御座候間、転任御聞届被成下候様、私ヨリ平ニ奉願上候、今朝罷出事情陳述可仕相考居候へ共、此内以来風邪ニ侵サレ熱氣未去外勤無覚束、不顧失敬以書中申上候、い細は牧野清三口頭ニ託シ候間、御聞取之程奉希上候、再拜、敬白 五月廿六日 黙介 白根県令様侍側

笹田④ 遺物配与ノ件 白根勝二郎宛 [明治十五年 五月十日 (白根家二五五) *]

拜啓筆硯倍御清穆奉恭賀候、御忌服中一度御伺旁出京仕度罷在候処、折柄転任事務多忙ニ取紛レ、乍不本意御無沙汰仕候、御葬式前後周旋人之儀被仰間相考見候処、渋難之際ニ付、確とは不相分候へ共、古拙別紙人名と心付候間差出申候、其内甲乙ハ有之申候頭書ニ而御承知可被下候、兼而御咄有之候御遺物御配与ハ左之人名ニ而可然候、杏坪書・香炉―吉田県令、笹田黙介―鉄舟分与、介石―宮内土木兼租稅課長、米仙人―川寫衛生兼学務課長、杏雨 村田庶務課長、藍田―山中勸業課長、直入 阿武會計課長、盛岡鉄瓶 大庭雄次郎、ヤツレ風呂飯田年祐、瓢箪 牧野清三、平鉄瓶 勝野秀雄、船越俊一、器局・三洲聯 坪井為春、渡辺忠利、名越鉄瓶 木原老谷、左畧右之通ト相考候、其他御内輪も可有之候歟と奉存候へ共、其辺は於小生取極兼候、且又分与之義、大庭へ御伝言之趣承知仕候、何卒御讓与相願度、兼て希望罷在候付而は、乍御手数神田小柳町伊勢屋伝二郎方へ御届奉願候、右用事而已如此候、頓首 五月十日 黙介拜 勝二郎君玉机下

四 川島楳坪の書簡

川島楳坪 (梅坪) (天保六年、明治二十四年 埼玉平民) は、蚕種大総代を務めたことから白根県令に認められ、県庁に招かれた。明治九年に学務課長に抜擢され、学制確立期の本県学務行政に貢献した。芳川波山に学び文筆に優れ、『埼玉県地誌略』等を執筆。郡長となり、二十二

県令白根多助への書簡 (芳賀)

年まで勤めた。白根の没後間もなく、旧名の浩に復名した。

書簡①は県令との親しい關係を窺わせ、末尾には世情が記されている。②は学務行政、③④は明治十四年の巡幸に関する書簡である。

川島① 時計払下外 明治十二年十一月廿一日 (白根家二〇)

翰教拜読、時下小春之候、愈御清穆奉恭賀候、小生無事罷在候、御鑑慮可被下候、陳者御出京以來、戸長役場費論及地租通欠之両條御心遣被成下候趣遠察仕候、尚此上為國家毎々御尽力奉希候、嘗而御嚙申上候時計之儀、他ニ売物御購求之思召ニ付、從來御所蔵之分云々御讓与可相成候趣、大旱之雲雨の如く、御厚志之段不知所謝候、就而者右御所蔵之分御払下奉願候、且代金之儀今月は囊中之都合不宣候間、来月差上候様致度、甚以自由之至ニ御座候得とも、御允許被成下度、併而奉願候、右御答如此ニ御座候、時下霜寒千万御自玉奉折候、不宣 十二年十一月廿一日 川島楳坪 白根明府殿 追啓、満庁中替事無之、公務も稍清閑ニ御座候、且管下一般今年之豊作ニ而、芝居・角力・人寄等所々ニ有之、民心平穩太平之氣象相見へ申候、此際ニ兼而御心遣被遊候救荒予備之法相設候ハ、管民万世之計ニ可有之奉存候、頓首

川島② 文部卿対談資料送付 明治十三年十二月六日 (白根家二二)

霜風栗烈之候益御清穆奉欣然候、陳は過日は御上京相成、寒中御辛勞之儀不堪恐察之至候、其節申上候文部卿へ御對話之参考書類取調差上候間、御落手被下度、尤御面談而已ニテハ後日へ相残り不申候故、卿

ヨリ書面請求之場合ニ相成候哉も難計候ニ付、為念別ニ忝通相認奉差上候、卿は御存知之通英敏之人ニ有之、且各局長之中地方学務局長辻新次君ハ殊ニ事務通達之人ニ有之、地方学務之要領は同君へも御相談相成候様奉希望候、御上京之後庁中無異、御鑄慮相成度、時下寒氣凜冽為国家御自重奉禱候、草々頓首 十三年十二月六日 川島樸坪 白根明府侍史 二稟、御上京前御囑申上候中学師範学校改革之儀、当節取調中ニ付、御帰県之日委曲可及具状候、不在

川島③ 地所売物 明治十四年七月十三日(白根家二三)

翰教忙手拝読仕候、新暑之節ニ相成候処、台候日々御回易之趣不堪欣躍之至候、小生無事罷在候、御休意被下度候、陳は北足立郡地所売物之儀ニ付、長嶋氏来翰之旨奉申上候処、財勢之御都合も被為在、今般は御見合相成、尤吹上邨地方ニ有之候宅地ニ而、樹木も繁居、小家産も起し可得、別荘杯营造之見込有之地所之払物ニ而も御座候ハ、心懸居可申旨御内諭之云々奉敬承候、委細は長嶋ニ申含め置候様取計可申候、宜布御照領可被下候、一、荻野氏帰県便ニ御吩咐被下候北巡御供奉御断之公文、宮内卿宛別紙之通起草仕候、御裁可相成候ハ、本書は御発令之当日郵便箱ニ御投入方執事ニ御命被下度奉願候、若上申文不穩当之処御座候ハ、修正可仕候間、御返却被下度候、且北巡事務も今年は至極簡易ニ有之候、尤御輦路筋之諸務は荒増整頓之様子ニ御座候、御安意可被下候、右両條奉答旁如此ニ御座候、草々頓首 十四年七月十三日 辱知梅坪 白根明府梧下 尚々貴恙之儀も西洋医博士

之説ニ逐日御回陽之趣、渡辺忠利帰県承り益安心仕候、此上尚為国民御保養奉祈候、不宣

川島④ 巡幸慶賀案 明治十四年七月二十五日(白根家一九)

奉啓候、暑氣燦金、台候日々御回陽之御事ニ奉敬賀候、陳は北巡間近ニ相成候処、中外諸般整頓候間、幸ニ御休意被下度候、且今年は祝辭及県治之奏上ニも不及候事ニ承及、是は御巡幸之本末も御座候間、左も可有之儀ニ奉存候、然処、今回は御不例中御供奉難被遊御次第二付、下僚之身分如何ニも遺憾ニ奉存、依之笹田子と協議之上、一篇之賀表起草仕候、右は御発輦之当日宮内卿ニ御捧被遊候而は如何可有之奉存候、此訳は本県御奉職中三度御巡幸ニ際し、最早両街道御通輦之盛事幾回も無御座候様奉存候、左候得は、今般之御賀表は千載一時不可失之機会ニ御座候間、日夜精思被在候処、草案脱稿仕候、幸ニ御採扱被下候ハ、北巡録ニ登記相成、天下後世ニ伝り可申奉存候、依而は来廿八日草加出張之前草稿持参、貴邸ニ拝趨可仕候条御批准被成下候様奉願候、右は御胸算も可有御座奉存、一応以書中具陳仕候、書外拜晤可申尽候、草々頓首 十四年七月廿五日 梅坪 白根明府梧下 追啓奉申上候、本文之御賀表は六朝体ニ而四六之漢文ニ御座候、実は国字解ニ可致奉存候得共、前々之御祝文ニ撞着可仕候間、今回は別体ニ仕候、兎角草稿拜呈之上御取舍奉願候様可仕候、今日草案郵致度候得共、笹田之手ニ在之、旁以讓他日宜布御照領可被下候、時下非常之盛暑ニ相成、為国家御保養奉祈候

五 高津雄介の書簡

高津雄介（弘化四年、山口土族）は、明治四年に埼玉県十二等出仕となり、埼玉裁判所勤務を経て明治六年に埼玉県中属。警察畑を歩み、明治十三年に初代警察本署長に就任。明治十四年に検事となる。

書簡①は警部拜命時の書簡、②は警察官人事の上申書、③④は御猟場に関する書簡である。⁽⁸⁾

高津① 警察必要書類二付〔明治九年〕五月二十八日（白根家三九二）

芳墨拜誦仕候、先以御清適被為在、奉恐悦候、県地都合相変儀無御座御安意可被成降候、過日ハ不寄存被任二等警部、斯まで愛顧ヲ蒙り候段難有奉方謝候、乍不肖一層奮勵、万分一ヲモ奉酬度覚悟ニ御座候、早速御礼状モ可呈答之処、無其儀御無沙汰申上候段、平ニ御海容可被下奉願候、陳ハ兼テ被仰聞候警察上必要書類之儀二付、縷々貴諭之趣承知仕候、只様転写抄り不申遷延仕候、則命ニ随ヒ転写済丈ケ差出申候間、御落掌可被下候、格別御用ニ相立候程之ものニハ有御座間敷敷ト奉存候、尚氣付之書類ハ転写次第差出可申候、先ハ貴酬旁鷹毫拜呈、其内 玉体御保護奉專禱候、匆々頓首、九拜 五月廿八日 高津雄介 白根様閣下

高津② 警察官人事異動上申 明治十四年二月二十日（白根家八〇）*

七等警部平井光長、七等警部浅野成裕、右非常之御詮議ヲ以テ五等警

県令白根多助への書簡（芳賀）

部ニ御拔擢、平井光長ハ本署常務兼計算掛被命候様相願度候事、八等警部嶋田郁太郎、右七等警部ニ進メラレ、熊谷警察署長兼第二局長被命候様相願度候事、八等警部竹部斌、右幸手警察署詰被命候様相願度候事、右之通意見上申仕候、高明御取捨之上、仰キ願ハ至急御詮議被下候様只管奉願候也 二月廿日 高津雄介 県令公閣下

高津③ 宮様御獵場状況報告 十一月十二日（白根家一八二）*

拜呈、弥御清祥奉大賀候、陳は兼而御下命有之候宮様御獵場之義、爾後注意罷在候処、昨今ハ雁・鴨等数多来リ、大ニ落付良候付、只今ナレハ十分之御獵ニも相成敷ト奉存候、高輪公ニハ本年ハ御出も無御座哉ニ飯田より伝承仕候付、左候得は、白川様ナリ早メニ御出相成候方好都合ト奉存候付、幸ヒ御帰京中之義ニも有之、旁御内慮までニ申上置候、万ニ御帰県も御手間取り、御不在中ニ宮様方御越シ被為在候御都合ニ相成候得は、前日乍御手数御報知相仰度、然レハ御獵場等之処も夫々旧例ニ依リ手配仕置、一入之御興ニ相成候様可仕候、先は為其、頓首 十一月十二日 雄介九拜 白根様閣下

高津④ 宮様方鴨獵二付 十一月十六日（白根家三九三）*

拜呈、一昨日来両度之御下命謹而奉承知候、先以老台御清祥之段奉大賀候、本日前七時過頃、有栖川両宮・東伏見宮・北白川宮・山階宮様方御越シ被為在候処、生憎鳥ハ昨前十時頃立去リ本日は来ラス、併シ鴨ハ少々落付居候得共、漸ク三羽程御手ニ入り、鳩杯ハ当地ニテ拾羽

余御手ニ入り候次第ニテ、充分ト申ス訳ニハ有御座間敷候得共、可ナリ御慰ニハ相成申候、御昼食ヲ尊宅ニ於テ被為濟、直様御発車、御歸路蕨駅近傍御遊獵、御帰京被為在申候、只残念ナルハ鷹之居合セサルマテニテ、百事御都合宜敷一条相濟候間、御休神可被成下候、有栖川様ニは鷹之居合セサルヲ御遺憾ニ被思召候気味御座候半、此往キ鷹落付タルトキハ一報候様被仰置申候、序ニ任セ此段ヲモ申上置候、先ハ前頭御報知迄、寸楮乱呈、折角時季御自愛奉專禱候、頓首九拜 十一月十六日 高津雄介 白根様御窓下

おわりに

今回採り上げた書簡は、前回同様、元文書館長吉本富男氏の指導の下に、文書館の職員有志で解説したものである。

参加者は以下のとおりである。阿部深雪・石岡康子・石塚由紀子・伊藤仁・岩崎士朗・大松久巳・笠原健司・木戸陽子・小林陽子・佐野久仁子・柴崎友子・関信子・田矢真司・中島真由美・長島小夜香・芳賀明子・橋本栄・細野健太郎・細村一彦・森房子・森田順子・吉田元・綿貫瑞穂（五十音順・敬称略・元職員を含む）。なお、*を付した書簡は筆者が追加した。

最後に、長年にわたり職員有志の解説会を御指導いただいている吉本富男氏に感謝申し上げます。

註

- (1) 佐野久仁子・長島小夜香「書簡にみる初期埼玉県政―県令白根多助と書記官吉田清英」『文書館紀要 第十七号』（埼玉県立文書館 平成十六年刊）。書簡史料の原稿作成及び整理を筆者が担当した。
- (2) 収蔵文書目録 第二十七集「諸家文書目録Ⅳ」（埼玉県立文書館 昭和六十三年刊）
- (3) 県官の履歴は、『埼玉人物事典』（埼玉県 平成十年刊）、『埼玉県行政史第一巻』（埼玉県 平成元年刊）、『埼玉県行政文書 県官履歴 明九〇七・明九一七・明九三〇・明九三二』（埼玉県立文書館蔵）に拠った。楯取と岸良の履歴は、『群馬県史 第四巻』（昭和二年 群馬県教育会刊）に拠った。
- (4) 白根家の書簡は菲塚二三郎氏を介して、御子孫である白根春助氏から文書館に寄贈された。菲塚氏は、その著書『関東を拓く二人の賢者―楯取素彦と小野島行薫』（さきたま出版会 昭和六十二年刊）の中で、楯取と白根の関係を詳述し、楯取の書簡の抜粋を紹介している。
- (5) 岸良の書簡は、他に、『勝三郎勤務筋二付』（白根家三二五）、『年賀状』（白根家三二九）、『痰咳差起り二付』（白根家三三二）がある。
- (6) 笹田の書簡は、他に、『採用推薦状』（白根家一〇八）がある。
- (7) 川島の書簡は、他に、『上申書投入日付ノ件』（白根家四）、梅坪（梅坪）から浩への復名を知らせる「旧名復帰通知」（白根家二四）、『三条公額面演装二付』（白根家一〇四）がある。
- (8) 高津の書簡は、他に、『自殺原因ノ供述報告』（白根家一八三）、『小野町田両人一件』（白根家三九二）がある。